



堀船中だより

心身ともに健康にして、国際的視野に立って社会に貢献し、自立した人を育成する。

教育目標

自ら学び 自ら考え 自ら行動できる生徒

《祝 2年生 小林（紗）さん 席書会で東京都中学校書写研究会会長賞 おめでとうございます》

1月22日（月）、北区立王子小学校王子ホールにて、北区中学校書き初め席書会が行われました。本校からは、2年生の小林（紗）さんが代表生徒として書き初めを行い、審査の結果、東京都中学校書写研究会会長に輝きました。本当におめでとうございます。小林（紗）さんの作品は、2階事務室前の廊下に掲示されております。

《祝 校内書き初め展 金賞受賞 おめでとうございます》

金賞 3年生 浦辺さん、上村さん、大島さん、山田（悠）さん

2年生 小林（紗）さん 陳さん、石川さん

1年生 前川さん、酒井さん

みなさんの素晴らしい書写作品に感動しました。おめでとうございます。

《祝 北区中体会バドミントン冬季シングルス大会 優秀な成績をおさめました。おめでとうございます》



1月28日（日）、北区中体会バドミントン冬季シングルス大会が滝野川体育館で開催され、堀中バドミントン部のみなさんが大変優秀な成績をおさめました。

1年生女子シングルス 阿部さん 優勝

1年生女子シングルス 内海さん 第3位

1年生男子シングルス 河村さん 優勝

1年生男子シングルス 西丸さん 第2位

1年生男子シングルス 上浦さん 第3位

男女とも、日頃の練習の成果を十分に発揮して、

立派な成績をおさめることができました。本当におめでとうございます。

《土曜授業日に校内作品展を行いました》

1月13日（土）の土曜授業日に、校内作品展を行いました。多くの在校生の保護者の皆さま、そして標準服等の採寸に来られた入学予定の6年生と保護者の皆さまが、生徒のみなさんの様々な作品を見て、たくさん褒めてくださいました。お忙しい中、本当にありがとうございました。

《北区中学校連合展覧会が開かれました》

1月27日（土）～29日（月）、北区中学校連合展覧会が北とぴあ B1 展示ホールで開催されました。堀船中のブースには、書写・美術・技術・家庭科の作品・3組のみなさんの作品が展示されました。ご来場いただきました皆さまには、改めて感謝申し上げます。



～津田梅子の生き方（9）～アリス・ベーコンの来日と梅子留学の希望～

華族女学校は、梅子が思い描いていた理想の女子教育の実践の場とはなりません。良妻賢母の育成を教育方針に掲げる華族女学校において、梅子が教える英語は重視されるような科目ではありませんでした。そして良家出身の生徒達は、伝統的な教養の外にある英語を学ぶことに対して積極性に欠けていました。アメリカのような自立した女性の育成を目指す梅子は、ここでも大きな落胆を感じるようになりました。

そんな華族女学校に勤務してしばらくすると、校長が英語のネイティブスピーカーを探しているという話が梅子の耳に入りました。梅子は、大山捨松のホストシスターであったアリス・ベーコンが適任であると考えました。

アリス・ベーコンは、捨松の世話を引き受けたレナード・ベーコンの末娘です。1858年2月16日、コネチカット州のニューヘーヴンで生まれたアリスは、梅子より6歳あまり年長です。彼女はヴァッサー大学出身で、捨松の同級生でもありました。華族女学校での教師としての招聘があった頃のアリスは、ヴァージニア州ハンプトン市の師範学校で教える教師でした。この師範学校は、黒人やネイティブアメリカンなどを教育する特殊な学校として名を知られていました。

そんなアリスは、姉妹のように育った捨松に再び会いたいという想いを抱いていたため、「日本に来る機会があれば」と願っていたのです。当初は捨松がつくる学校を助けてアリスが来日する、という夢が捨松とアリスの2人の間で語られていました。現実には、捨松が準備委員会として創設に尽力した華族女学校を舞台に、そこで勤務していた梅子が推薦することで、アリスは日本に招聘されることになりました。梅子にとっても、アメリカで教師としての経験がある優秀なアリスが同僚になれば心強いし、大変嬉しいことでした。そうした経緯から、アリスは1887年に華族女学校に正式に招聘され、1888年6月に来日しました。アリスと梅子は麹町紀尾井町にある公使の留守宅を借りて、半分は西洋式に、後の半分を日本式にして、シェアハウスを開始しました。

やがて梅子はアリスと深く語り合ううちに、第一級の教師になるためには再度アメリカに留学することが必要だと考えるようになりました。しかし、問題は費用でした。捨松とアリスの母校であるヴァッサー大学が候補に挙がりましたが、捨松の話によれば、ヴァッサー大学の授業料は高額で、学生たちも裕福な暮らしの者ばかりだということでした。政府からの奨学金も期待できない状況です。そんな中で、梅子は、自身をまるで本当の娘のように可愛がって育ててくれたアメリカにいるアデラインに、こんな手紙を送っています。

「今、経験している通り、生涯教師として生きていこうと思っています。通常の人生を歩むのなら十分な教育はすでに受けていると言えるかもしれませんが、私はもっと教育を受けたいのです。自分の仕事に十分に準備したいですし、日本には能力や力量を持った人々が必要なのです」

数年で良いからアメリカに行って教授法等についてさらに学びたい、という高い志をもった梅子の真摯な願いでした。また、これと同時に梅子は「節約すれば1か月に50ドルで学校に行くことができるだろうか」とアデラインに尋ねています。留学への想いを強める梅子は、アメリカ北東部の女子大学であるスミス、ウェルズリー、マウントホリヨークの大学カタログを送って欲しいとアデラインに依頼すると、有給での留学の許可を得るべく華族女学校と交渉を進めます。華族女学校での地位と給与が保証されるという条件は、留学にあたって勝ち得なければならぬ重要な事項でした。アリスも梅子のアメリカ留学計画に賛同し、大いに励ましてくれました。アリス自身も生涯を教師として過ごすことを決意していたので、梅子の教師としてのひたむきな想いに共感し、後押ししてくれたのです。

そんな中、梅子がアーチャー・インスティテュートに在学中に出会ったことのあるメアリ・モリスという女性が、梅子の留学の希望について、クララ・ホイットニーを通じて知ることになります。クララは梅子が帰国してから出会ったアメリカ人の友人です。モリスは当時のプリンマー大学の学長ジェームズ・ローズをよく知っていたので、梅子のために掛け合ってくれました。そのおかげで、授業料と寮費が免除されるという破格の好条件のもと、梅子はプリンマー大学で学ぶことができるようになりました。

こうして、梅子の二度目のアメリカ留学は実現しました。一度目の留学はほとんど全て父・仙の力によるものでしたが、華族女学校との交渉に、アメリカ人からの支援の取りつけと、二度目の留学は梅子が自らの行動で手にした夢への切符でした。梅子はこの時、24歳でした。

参考文献：高橋裕子『津田梅子—女子教育を拓く』 岩波ジュニア新書 2022年 230頁
山崎孝子『津田梅子』 吉川弘文館 日本歴史学会編集 1988年 336頁



アリス・ベーコン

【提供】津田塾大学津田梅子資料室



華族女学校の遺跡碑

千代田区永田町 参議院議長公邸東門